

## 和歌と日本の恋 —永久再生可能文化資源としての古典文学—

久保朝孝 (国文学領域)

### 恋の歌から読み解く平安の心

古来歌い継がれてきた日本の伝統文学「和歌」。才気煥発な女官、恋愛経験豊富な貴族、そのほか詠み手の伝わらない様々な人々が「五七五七七」という形式に思いを乗せ、時代を超えて愛される歌を生み出してきました。優れた和歌を天皇の命により集めた勅撰和歌集も数多く編纂されてきましたが、その始まりであり、以後の勅撰和歌集のお手本となったのが『古今和歌集』です。今から11世紀以上前、平安時代に誕生したこの和歌集は、テーマに沿って全20巻で構成されています。その大部分を占めるのが、「季節」の歌と「恋」の歌。平安時代の人々にとって、四季の美しさや恋愛が大きな関心事だったことが伺えます。講演では、恋の歌を集めた巻第十一～巻第十五を取り上げ、当時の人々の心を読み解いていきました。

### 平安時代の恋愛観の極地

巻第十一～巻第十五には360首もの恋の歌が収められています。短時間ですべての歌を取り上げることは難しいため、今回の講演ではそれぞれの巻を代表する巻頭歌と巻末歌、合計10首をピックアップしました。久保朝孝教授は、それぞれの和歌の現代語訳だけでなく、当時の文化背景まで丁寧に説明。一つひとつに込められた様々な思いを受講者に伝えました。そして、10首目にあたる巻第十五の巻末歌。「流れては 妹背の山の 中に落つる 吉野の川の よしや世の中」。これは、“男女はひとつなれないと知っているからこそ、どうにかひとつになろうと懸命になる。しかし、結局ひとつになどはなれない。”そんな諦めの境地を詠んだ歌であり、久保教授はこれを「平安時代の人々の恋への最終結論」と評しました。

### 古典とはエコロジー文化遺産である

『古今和歌集』に収められた歌は、それ以降の作品に度々引用されてきました。過去の和歌を自身の作品に引用することを引歌と言いますが、その技法を多用した古典の代表に『源氏物語』があります。著者である紫式部は、引歌だけで一冊の本を作ることができるほど数多くの歌を引用して、源氏物語という名作を作り上げました。引歌の効果で、より趣深く、奥行きある世界が作られたと言っても過言ではありません。古典の世界では古き良き作品がそのまま朽ちていくのではなく、それを土台としてまた新たな名作が生み出されてきたのです。久保教授は講演を次のように締めくくりました。「古典とは、それ以後の作品に再利用されながら生き続ける、とてもエコロジーな文化遺産なのです」。